

重度の精薄児は、かなよりも漢字が大好き

神戸の垂水に“縦の木学園”という、重度の精薄児のための学園があります。児童と教師とが一緒にそこで起居をしている、いわゆる二十四時間教育を行っている学園です。

私は、八年ほど、特殊学級の児童、生徒たちと同じ建物の中で暮らしたことがあります。それで、縦の木学園の園長から指導を頼まれた時、気軽にそれを引き受けました。

しかし、教室に案内され、子供たちの顔を見た時、その表情の異常さに、正直なところぎょっとしました。予定していた話はこれではとても通じないなと思うと、頭が混乱状態に陥り、私はしばらく茫然としてしまいました。

ここには、知能指数の測定不能という子供も何人かいて、私は初めて、精薄児にもいろいろな段階のあることを、はっきりと知らされました。

私は、心を取り直し、園で飼っている羊のことを話題に、子供たちに話しかけました。子供たちが私の話を受け入れてくれているのかどうか、その反応が解らないということは全く話しにくいものです。私はこの時、

心の落ち着きを完全に失っていました。

ひどく長く感じられた時間も、終わりに近づいて、黒板に書いた“羊”など、いくつかの漢字を試みに質問してみました。すると「ひつじ」と読むではありませんか。「ようし、もう一度やってみよう」と思いました。

一か月ほどたって、今度は猿蟹合戦の話をしました。猿、蟹、蜂、栗、臼、五枚の漢字カードを作り、これを提示しながら話を進めていきました。話が終わり、これらのカードを読ませてみますと、どのカードもだれかしら読んでくれます。でたらめに読む子、誤って読む子は一人もいませんでした。

かなは読めなくても、猿や蟹は容易に覚えられて読め、読める漢字が大好きだ、ということをおはここでも教えられました。